

Title	世阿弥と三郎元重（その二）：応永末年～永享初年の三郎元重と観世座の関係をめぐって
Author(s)	天野, 文雄
Citation	演劇学論叢. 2009, 10, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97475
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

世阿弥と三郎元重（その二）

——応永末年〜永享初年の三郎元重と観世座の関係をめぐって——

天野 文雄

はじめに

よく知られているように、永享四年（一四三二）八月に十郎元雅が伊勢で客死して約七カ月後の永享五年三月、世阿弥は『却来華』の冒頭に、

当道の芸跡の条々、亡父の庭訓を承けしより以来、今老後に及んで、息男元雅に至るまで、道の奥義残りなく相伝終りて、世阿は一身の一大事のみを待ちつる処に、思はざる外、元雅早世するに由て、当流の道絶えて、一座すでに破滅しぬ。さるほどに、嫡孫はいまだ幼少也。やる方なき二跡の芸道、あまりにあまりに老心の妄執、一大事の障りともなるばかりなり。たとひ他人なりとも、その人あらば、この一跡をも預け置くべけれども、しかるべき芸人もなし。

という絶望的な慨嘆を書きつけて、一座（観世座）の破滅を宣言している。世阿弥は前年の九月、元雅没後まもないころ執筆の『夢跡一紙』にも、元雅の逝去を「道の破滅」と嘆いているが、これらから、このときの世阿弥が元雅の早世によって、観阿弥以来の芸統を伝えてきた観世座が解体したと認識していたことが知られる。また、ここではそれに続けて、「たとひ他人なりとも、その人あらば、この一跡をも預け置くべけれども、しかるべき芸人もなし」としているが、この記述については、香西精氏が「元雅行年考—新・三郎養嗣子説—」（『統世阿弥新考』）において、「現に目の前に観世大夫を名のっている元重のあるのを無視して、まるで観世の流れを酌まない他流であるかのような扱い方をしている」とされているが、まったくそのとおりであって、この時点において、世阿弥が三郎元重を観世座の一員と考えていなかったことは明らかである。

以上の『却来華』やそれに先立つ『夢跡一紙』から、元雅が没した永享四年ころには、世阿弥は三郎元重を観世座の一員と考えていなかったこと、それゆえ、元雅の没後、亡き元雅に代わる有力な座衆がいらない観世座は破滅したと考えていたことが知られるが、そもそも、世阿弥は、かつては観世座（あるいは観世家）の後継者と決めていた三郎元重を、いったいいつからこのように観世座の一員とみなさなくなつたのであろうか。

本稿では、応永末年〜永享初年ころの能界の動向と一体不可分の関係にある世阿弥と三郎元重の微妙な関係を、右に述べたような、三郎元重と観世座との関係、あるいは観世座における三郎元重の位置という視点から検討しようとするものだが、ここに三郎元重と観世座との関係というのは、たとえばたんに三郎元重の分派的な活動というような実態面のことではなく、ある時期の三郎元重が組織としての観世座の一員であるのかどうか、といういわば制度的な関係のことであり、あるいは世阿弥が三郎元重をいつまで観世座の一員とみなしていたかという世阿弥の意識の問題でもある。上述のように、永享四年ころには、三郎元重は確実に観世座の一員とは考えられていなかったのであるが、以下では、そうなたつたのがいつからなのか、あるいは世阿弥が三郎元重をいつまで観世座の一員と考えていた

のか、といったことなどをいくつかの点から考えてみたいのである。それはおのずから、世阿弥出家以後の応永末年〜永享初年の能界の動向についての考察ともなるものと思ふ。

一 『満濟准后日記』 永享元年五月三日条の

「観世大夫両座」をめぐる

【1】『満濟准后日記』の「観世大夫両座」

三郎元重と観世座の関係というと、まず想起されるのは、『満濟准后日記』永享元年（二四二九）五月三日条の「観世大夫両座」であろう。

永享元年五月三日、三条坊門の將軍第の馬場において大掛かりな能が催された。この能は、前年、急逝した兄義持のあとをうけて足利將軍家の家督を継承し、二カ月前の三月十五日に將軍宣下を受けたばかりの義教の主催であるから、義教が晴れて義持の後継者となつたことを天下に宣言することを目的にした祝儀の能と思われるが、周知のように、この能興行を伝える『満濟准后日記』同日条には、「観世大夫両座」という記述がみえる。あらためてその記述がある『満濟准后日記』の記事をかかげるならば、以下のとおりである。

於「室町殿御所笠懸馬場」、観世大夫両座一手、宝生大夫十二五郎一手ニテ出合申樂在之。如「多武峰芸能致」其沙汰了。乗馬甲冑等悉用「実馬実甲冑」了。驚「耳目」了。二條摂政、聖護院准后、如意寺准后、実相院、宝池院、青蓮院、徳大寺、少生等、於「同棧敷見物」。一献等為「公方被」仰付也。終日活計。申樂十五番仕候了。自「此棧敷中」寄合、万疋進仕了。

この能は会場が御所邸内ではなく、屋外の笠懸馬場であり（笠懸馬場は固有名詞ではなく笠懸―騎射―を行う馬場のことらしい）、「如「多武峰芸能」致「其沙汰」了。乗馬甲冑等悉用「実馬実甲冑」了」とあるように、一部に実馬・実甲冑を用いたいわゆる多武峰様の能が上演されたことでも著名な催しである。上演された能は十五番で、『建内記』同日条によれば、そのうちの三番が《綾織》《呉服》《一谷先陣》《二度掛》、《秦始皇》《咸陽宮》で（カッコ内は相当する現行曲あるいは廃曲の曲名を記した）、そのうち《一谷先陣》《二度掛》が多武峰様で上演されたこと、その《一谷先陣》に十郎元雅が義経役で、三郎元重が梶原役で登場したことが知られる。また、『申楽談儀』十一條の記事によれば、この能には世阿弥も招かれていて、『鵜飼』を演じたらしいことも知られる。また、このときの能は系統を異にする座や演能

グループが招集され、それが二手に別れての「出合」というかたちで催された点でもやや異彩をはなっている。「出合」は「立合」と同義で、現代風にいえば二チームによる対抗戦というようなことであろうが、その二手の一方が「観世大夫両座」であり、もう一方が宝生大夫（通称、実名とも不明）と十二五郎（十二権守康次）の連合チームであった。

この「観世大夫両座」の「両座」は、十郎元雅の「一座」と三郎元重の「一座」とする点で異説がないが（もちろん、筆者もそう考えている）、三郎元重と観世座の関係を考えようとする場合に、まずこの記事が想起されるのは、いうまでもなく「観世大夫両座」という、あたかも観世座が二つ存在しているかのようなその記述ゆえである。この能が催されたのは、もともと三郎元重を後援していた義教が前年に足利將軍家の家督を継承して以来、急速に三郎元重を引き立てはじめた時期であり、この「観世大夫両座」の記述をもつて、それ以前に観世座は分裂していた―三郎元重は観世座の一員ではなくなっていた―と考えるのはごく自然な道筋ではあろう。事実、これまで、この記事についてはほぼそのように理解されてきていると思われるが、以下では、まずこの「観世大夫両座」についての諸家の見解を概観しておこう。

【2、「観世大夫両座」についての諸家の見解】

もつとも、この記事についての言及は意外なことにあまり多くはない。以下、それを時代順にみてゆこう。

まず、野々村戒三氏の見解。野々村氏は昭和六年刊の『能楽古今記』の「観世四代史考」において、「永享元年五月三日、一方に観世両座と、一方に宝生太夫及び十二五郎との、出合猿楽が、室町御所の笠懸馬場で張行せられた」として『満濟准后日記』の同日条を引いたあと、「是處に「観世両座」とあるのは、世阿弥の甥三郎後音阿弥の方との両座を云つたものであらう」とされている。昭和十三年の同氏『能苑日渉』に収められた「世阿弥父子の失脚」もほぼ同じ記述である。もつとも、これだけでは、野々村氏が「観世大夫両座」をどのように理解していたのかは、かならずしも分明ではないが、「両座を云つたものであらう」と「両座」とされている点、この記事を観世座の分裂と理解されていたのではないかと思われる。

つぎは能勢朝次氏の見解。能勢氏は昭和十三年刊の『能楽源流考』の「観世猿楽考」のなかで二度にわたって問題の記事を引いていて、その一回目の引用のあとでは、「この「観世大夫両座」とあるのは、観世元雅の座と音阿弥の座と見るべきものである」（七二四頁）とされ、二回目の引用のあとには、「ここに観世大夫両座とあるのは、観世

大夫十郎元雅の座と、音阿弥元重の一座とをさしたものであり、音阿の座の成立してゐたことを物語るものと思ふ」（七五四頁）とされている。これによって、能勢氏は「観世大夫両座」を観世座の分裂と把握していたことが知られる。

つぎは表章氏の見解。表氏は昭和五十三年一月の『鍊仙』掲載の「「観世大夫元雅」小考——大夫号の意義の変遷——」（『観世流史参究』所収）において、「永享以後には…既に「観世大夫両座」（同書、永享元年五月三日）の表現が示す如く、観世座は十郎元雅の座と三郎元重の座に分裂していた。そして將軍足利義教の後援下に花々しく活動したのは元重の率いる観世座であり、元雅の座は宝生座と同程度にしか幕府に用いられず、永享四年の元雅早世によって破滅するに至るのである」として、観世座は両座に分裂していたとされている。表氏は後述のように後年にはやや異なる理解をするようになるのであるが、ここでは「観世大夫両座」を観世座の分裂と理解している。

さいごに劇作家堂本正樹氏の見解。堂本氏は昭和六十一年に当時の研究状況をよくふまえたユニークな世阿弥の評伝である『世阿弥』（劇書房）を刊行しているが、同書では、永享初年の三郎元重をめぐる状況が、「分裂した別派三郎の座」「別派観世座」などと表現されていて、この時期の観世座が分裂していたとの立場で執筆されている。

「観世大夫両座」について見解が直接示されているのは、管見では以上の四氏くらいであるが、この記事にたいするコメントではないものの、香西精氏が「元雅行年考―新・三郎元重養嗣子説―」（『続世阿弥新考』）において、応永三十四年（一四二七）の稲荷辺での三郎元重の勸進能を元重の「独立の第一歩」ととらえ、以後の世阿弥と三郎元重の関係を、「元雅本座」と「元重新座」という用語で表現しているのも、上記諸氏の観世座についての理解と同じ認識であろう。香西氏が「元雅本座」「元重新座」という用語を用いているのも、「観世大夫両座」をふまえているように思われる。

以上は「観世大夫両座」を観世座の分裂ととらえた理解であるが、一方、この記事をそうとらえるのに慎重な立場もある。表章氏の後年の理解がそれで、氏は昭和六十二年の『岩波講座能・狂言Ⅰ「能楽の歴史」』の「能楽史概説」において、義教の世阿弥父子にたいする圧迫について述べたあと、「同じ観世座の一員だった元重が独立的傾向を示すようになったのも当然の趨勢で、「観世両座」なる記録も現われ、実質は元重が観世座の主流を占めるに至ったのである」とされている。このように、ここでは問題の「観世両座」を元重の「独立的傾向」を示すもので、元重が観世座の主流を占めるようになったことを示唆する記述と解されている、かならずしも観世座の分裂とはとらえていな

いことが窺える。同氏はまた、平成十三年の小学館新編日本古典文学全集『連歌論集・能楽論集・俳論集』の『習道書』の解説でも、同書奥書年記の永享二年（一四三〇）当時の能界の状況―義教による三郎元重の引き立て、世阿弥父子にたいする圧迫―を述べたあと、「観世座が三郎元重大夫と十郎元雅大夫の二グループに分離したためか、前年には「観世両座」なる記録が現れているほどである」として、「両座」をグループという言葉で表現しているが、これも「観世大夫両座」をかならずしも観世座の分裂とはみようとしない立場の現われであろう。

【3、「観世大夫両座」についての私見】

以上、『満濟准后日記』の「観世大夫両座」については、これを観世座の分裂とする理解が一般的であること、また、一方には、この記事をただちにそうみるのに慎重で、これを「観世座内の二つのグループ」とする立場のあることも紹介した。

このうち、「観世大夫両座」を観世座の分裂とみる見解は、義教の後援を後盾にした永享初年当時の三郎元重の活動とあわせ考えるならば、まずは自然な理解としてよいかと思う。また、そのような理解は、『満濟准后日記』の文脈からも、それなりの妥当性がある。というのは、こ

のときの能は二手に分かれての立合だったが、一方の宝生大夫と十二五郎の組は、宝生座と十二座という二座の連合チームである（十二五郎は観世座の座衆的な側面も持つ役者だが、ふだんは十二座という座の棟梁として活動していたと思われる）。とすれば、もう一手の「観世大夫両座一手」も座と座の連合とみるのが自然であり（なによりもそこでは「両座」の連合とされている）、その点で、この「両座一手」は香西氏の記述にしたがえば「元雅本座」と「元重新座」という二つの座——二つの観世座——の連合とみるのが自然ということになるろう。

しかし、ここで筆者が問題にしているのは、三郎元重が世阿弥父子と離れて活動しているということとは別に（永享以降の両者の別行動は明確な事実である）、この時期、三郎元重が観世座という組織の一員であったかどうか、あるいは世阿弥や元雅がそう認識していたかどうかということであり、その点において「観世大夫両座」をどう解すべきかということである。

そこで、あらためて「観世大夫両座一手」という表現に着目してみると、そこには「観世大夫」の語がみえる。この時期の記録（ほとんどが『満濟准后日記』）にみえる観世大夫についてはそれが世阿弥か元雅かで論が分かれており、この「観世大夫」についても同様の問題がある。筆者はこ

の時期の記録にみえる観世大夫は世阿弥であろうと考えており（応永末年〜永享初年の醍醐寺清龍宮祭礼能の「観世大夫」【おもて】94号）、この「観世大夫」もこの催しに参加していた世阿弥であろうと考えているが、それはともあれ、ここで明確にしておきたいのは、この「観世大夫」が世阿弥、元雅のいずれであれ、観世大夫は一人だということである。この点に留意するならば、問題の「観世大夫両座一手」は、「観世大夫の側は世阿弥父子と元重の両演能グループが連合して一手になって」と解されるのであって、三宝院満濟もそのような意味あいでは「観世大夫両座一手」と記したのではないかと思われるのである。これを要するに、「観世大夫両座」の「座」は文字どおり座（猿楽座）の謂ではなく、「観世座内の演能グループ」のような意味で用いられていることになり、さらにいえば、「観世大夫両座」は「観世座」内に有力な二つの演能グループが存在することを端的に示す資料ではあるが、かならずしも組織としての「観世座」の分裂とか、組織としての二つの「観世座」の存在を示すものではないことになろう。なお、「観世大夫両座」の「座」がかならずしも猿楽座の意味でないことについては、『習道書』に類出する「一座」の用例の大半が「猿楽座」の謂ではなく「その場所」の謂であるとする表章氏の指摘（『世阿弥禅竹』補注など）が参考になる。その『習道書』の「一座」

の多くは、表氏の指摘のように「その場所」の意味でもありと同時に、「そのときのグループ」と解することが可能なのである。

以上の私見はさきに紹介した表章氏の後年の理解と重なる。あるいは、これだけで「観世大夫両座」を「観世座内の二つの演能グループ」と断定するのは十分ではないかもしれないが、ここではとりあえず、従来は観世座の分裂の明確な徴証と考えられていた「観世大夫両座」については、以上のように解するのが妥当であろうことを述べておきたい。

二 『習道書』の「棟梁不足」説をめぐって

【一、『習道書』の「棟梁不足」説についての表章氏の問題提起】

永享初年ころの「観世座」の実態を考えようとする場合の資料に永享二年（一四二九）三月の奥書がある『習道書』がある。同書は、「一座成就」すなわち能の上演において理想的な成功を実現するために、能の役ごとの心得を説いた書で、棟梁の為手の心得、ワキの為手の心得、鼓役者の心得、笛役者の心得、狂言役者の心得という順に各役の心得が説かれている。そのワキの為手の条の中ほどに、つぎ

のような記事がある。

そもそも、脇の為手の心中に、ことわけ心得べき道あり。棟梁の指南に従ふを以て、脇の為手とは名づけたり。たとひ棟梁の不足なりとも、それにつきても、力なき為手として、一座を持つほどの主頭には、ことわけ、脇の為手従ふべし。棟梁不足なればとて、脇の為手の上手、別心の曲をなさば、一座不同にして、能の順路あるべからず。よきにも従ひ、悪しきにも従ふを以て、脇の為手とす。これ第一の具行なり。具行なくば、能姿無異にはあるべからず。この理をよくよく心得て一座をなすを、脇の為手の道とは申すべきなり。

ここでは、ワキの心得として、棟梁の為手に従うべきことが一貫して説かれているのだが、そのなかで、ワキはたとえ棟梁の為手が力量不足であっても棟梁の為手に従うべきだと、棟梁への絶対服従ともいえる心得が強い調子で説かれている（傍線部）。この記事に最初に注目したのは、堂本正樹氏の『世阿弥』で、堂本氏はこれを一般論とはみず、「座頭たる十郎元雅の、実力不足、人望不足、人気不足」を示唆する一文と解している。その後、やはりこの記事を一般論とはみずに、十郎元雅の役者としての力量とい

う点からあらためてこの記事に注目したのが、「観世流史参究」と題して『観世』誌に観世家歴代の事績の再検討を連載執筆した表章氏である。表氏は、その「⑥観世十郎元雅とその後裔」（『観世』平成十一年四月、のち『観世流史参究』（平成二十年、檜書店）に収録）のなかの「c、元雅と棟梁の為手」において、『夢跡一紙』が伝える世阿弥の元雅賛美を紹介したあと、「それにしては、永享二年に書かれた『習道書』に気になる一文が含まれている」として、右の記事を引いたあと、この記事が提起する能楽研究上の問題についてのぎのように述べている。

難解な所もあるが、要するに、棟梁の為手が力量不足であつても、脇の為手は棟梁に従えとの教訓である。当時の観世大夫は十郎元雅だった。それなのに、「たとひ」と仮定の形ではあるが棟梁が不足の場合の脇の為手の心得を説いており、ここだけを読めば元雅は力量不足の大夫だったのではないかと疑われよう。それでは前述の『夢跡一紙』の最高級の褒め言葉と大きく食い違う。そこをどう解すべきなのであろうか。当時の観世座の状況にこだわらずに一般論として理解すればいいのかも知れない。『習道書』の全体が一曲を演じる中での主役・脇役の役割を主体にした一般論中

心に論じられてもいる。が、曲中での役割を越えてわざわざ書き添えた右の一文を、当時の観世座の状況と無縁の発言とは受け取りにくい。思いあぐねてひねり出したのが、大夫即棟梁と決めつけずに、当時の観世座の棟梁は出家したものの現役として活動していた世阿弥で、高齢になった自己を「棟梁不足」「力なき為手」の語で表現し、脇の為手に協力を要請したと解してはどうかとの考えである。我ながら釈然としない解釈であるが、それでも解さないと元雅名人説を疑う結果になってしまう。疑うのが正しいのかも知れず、大方の御高教を賜りたい点である。

この「観世流史参究」の「⑥観世十郎元雅とその後裔」は、短文ながら、このほかにも、元雅と元能はどちらが年上かという問題、元雅の初名が元次だったろうという定説への疑義、元雅が観世家の歴代に数えられていない理由など、元雅の事績について、これまでほとんど留意されていなかった問題が提起されている。筆者はこの稿が発表された平成十一年当時、これらの問題提起を強い印象をもって読んだ記憶があるが、ここに紹介した『習道書』の「棟梁不足」説をめぐる問題提起は、たんに元雅の役者としての力量という問題だけでなく、前節で問題にしたような、当

時の觀世座の状況とも深くかわつてゐる点で、筆者には
きわめて重要なものと思われるのである。

もつとも、これも表章氏が言及しているように、右の『習
道書』の「棟梁不足」説については、あくまでもそれは
一般論だとする見方もあろう。現に、『風姿花伝』奥義に
みえる「たとひ、天下に許されを得たるほどの為手も、力
なき因果にて、万一少し廢るる時分ありとも、田舎・遠國
の褒美の花失せずば、ふつと道の絶ふることはあるべから
ず」という箇所についても、これを当時の世阿弥が実際に
一時「廢るる時分」にあつたことをふまえた一文とする見
解と一般論だとする見解があり、この種の問題は容易に決
着がつかないことが多いのだが、世阿弥の芸論に執筆当時
の世阿弥がおかれていた状況の投影があることは、（これま
ではあまり留意されてはいないが）それなりに認められてしか
るべきであろう。筆者も『遊樂習道風見』執筆の背景に元
雅の嫡子への教導という事情を想定したことがあり（『遊
樂習道風見』の執筆と世阿弥の環境』『おもて』95号）、また、応
永二十年代後半以降に改訂・増補された世阿弥の芸論に、
三郎元重を意識した文言が少なからず含まれているのでは
ないかと考えてもいるが（その点については次回の続稿で論じ
る予定）、問題の『習道書』の一文を、ワキの曲中における
役割を説くべき文脈から逸脱して「棟梁不足」説が展開さ

れているとして、これを一般論とはみなしがたいとされた
表氏の指摘は傾聴すべきものと思うので、以下では、その
立場から上記の表氏の問題提起に答えてみたいと思う。ま
た、そうした視点から右の『習道書』の一文を検討するこ
とが、当時の世阿弥と三郎元重の関係や、組織としての觀
世座と三郎元重の関係の解明という、本稿がかかげる問題
に答えることにもなると思うのである。

【2、元雅不勸説について】

まず、堂本正樹氏や表章氏が言及している元雅不勸説に
ついての検討から始めよう。

十郎元雅の役者としての才能については、それを疑う論
は、近世後期の『秦曲正名閔言』や『觀氏家譜』を除けば、
堂本正樹氏や表章氏以前にはなかった。そうした元雅評価
に決定的な影響を与えていたのは、いうまでもなく、元雅
逝去直後に書かれた『夢跡一紙』であろう。そこでは、よ
く知られているように、元雅は「子ながらも類なき達人」祖
父にも越えたる堪能」と絶賛されている。この『夢跡一紙』
の評価については、諸氏が言うように早世したわが子にた
いする過褒という面を考慮する必要があるとは思うが、し
かし、いくら割り引いても、元雅のことを、世阿弥が終生
敬愛していた亡父觀阿弥以上の役者だつたとしてゐる点か

らも、『習道書』のこの記事をもつて、元雅がじつは芸力不足の役者だったとすることは、とうていできないであろう。

さらに、元雅が凡庸な役者でなかったことには、第三者の証言がある。『隆源僧正日記』応永三十一年（一二二四）の記事がそれで、同日記四月十八日条には、この日、榎並に代わって新たに醍醐清瀧宮祭礼能の楽頭になった世阿弥について、同日記は「子供三人不劣親上手也云々」と記している。この「子供三人」は、十郎元雅、七郎元能、三郎元重のことで、「親」はもちろん世阿弥である。このときは、彼ら三人も世阿弥の監督下に祭礼能に出演したようで、「上手」という評価はその舞台を見物した者からの伝聞らしい。さらに、翌二十日には新楽頭世阿弥の楽頭始めの能が催されたが、『隆源僧正日記』には、新楽頭世阿弥が少年だったころ、この醍醐寺で催された七日におよぶ観阿弥の能において、少年世阿弥が「異能」を發揮したことや、その後の世阿弥が観阿弥にも劣らぬ評価をうけたことなどを記したあと、「今子供三人、又以上手也。声誉有之三代猿楽也」として、元雅、元能、元重の三人を「上手」として、観阿弥以来、三代にわたって名望をうけていることを、世阿弥の楽頭就任とあわせて祝福している。この「今子供三人、又以上手也」も楽頭始めの能を見物した者から

の伝聞と思われるが、こうして、『隆源僧正日記』には、元雅を上手と評価している第三者の評価が二度もみえてるのである。しかも、そのうちの一度は、親の世阿弥にも劣らない上手だという。こうしてみると、元雅不動説はどうも成り立たないと言わざるをえない。

【3】『習道書』の「棟梁不足」説についての私見

『夢跡一紙』の評価は多少は割り引いて考える必要があるにしても、元雅はやはりそうとうの名手であった。とすると、『習道書』の「棟梁不足」説はどう理解したらよいのであろうか。この点を表章氏は、上記のように「我ながら釈然としない解釈」としつつ、この記事を当時の観世座のメンバーという視点から解釈しようとして、このときの棟梁の為手は元雅ではなく老齢の世阿弥であつて、「棟梁不足」説は自身の老齢による芸の低下を背景にした発言ではないかとの推測説を提示されたわけであるが、その推測の前提になっている（大夫≠棟梁）という想定にはとくに根拠がなく、氏自身の言のとおり蓋然性の高い推測とは言いかねる。それでは、問題の記事はどう考えたらよいのであろうか。

ここであらためて問題の記事にもどると、そこで強調されているのは、「棟梁の不足」にたいする「脇の為手の上手」

の協調ということであり、その「脇の為手の上手」が「別心の曲」をなしたのではよい舞台にならない、という。この記事を一般論ではなく、当時の観世座の状況をふまえたものとして解釈しようとするならば、この時期の棟梁の為手は誰で、ワキの為手は誰であったのか、とりわけ、棟梁の演技などおかまいなしに「別心の曲」をなすような「脇の為手の上手」は誰なのかを具体的に考えてみる必要があるであろう。

そこで、まず棟梁の為手であるが、これは堂本正樹氏や表章氏がそう考えられたように、もちろん元雅であろう。世阿弥は応永二十九年（一四三二）四月以前に出家して、観世家の家督や観世座の棟梁（すなわち観世大夫）は元雅が継承していた（永享元年の元雅を観世大夫と呼んだ例が『申楽談儀』二十七条にある）。そうして元雅が継承した観世座の座衆にたいする心得を記したのが永享二年（一四三〇）の『習道書』なのであるから、同書にみえる棟梁の為手は元雅以外には考えられない。それでは、ワキの為手は誰なのか。表氏の稿ではこの点についてはとくにふれられていないが、私見によれば、当時の観世座には、「脇の為手の上手」といわれるにふさわしい役者が二人いた。一人は七郎元能、もう一人は三郎元重である。

もともと、七郎元能はよいとして、三郎元重を当時の観

世座のワキの為手とするのは、あるいはとんでもない妄説だとして一笑に付されるかもしれない。当時、三郎元重は世阿弥父子とは対抗関係にあつて、それこそ「観世大夫両座」と記されるように、ほとんど一座の棟梁のような活動を展開しており、世阿弥父子とは別個の活動が常態だったと思われるからである。しかし、それはあくまでも、実際の活動面での現象であり、前節でも検討したように、そのことはただちに三郎元重が観世座の一員でなくなっていたことを意味しない。したがって、実際の活動においては別行動が常態となりつつあるこの時期にあつても、世阿弥が三郎元重をなお観世座のワキの為手と考えていた可能性は十分にあるのではないかと思う。現に世阿弥と元雅は、『習道書』執筆の九カ月ほど前に催された室町御所の能で三郎元重と一座しており（このときのことらしい世阿弥の『鶴飼』の演技が『申楽談儀』十一条にみえる）、前述のようにこのとき元雅は三郎元重と多武峰様で演じられた『一谷合戦』で共演している。

また、近年紹介された『応永三十四年能番組』（国立公文書館所蔵『寺務方諸廻請』紙背）によれば、『習道書』執筆の三年前の応永三十四年（一四二七）二月の南都薪能のさいには、二月十日に別当坊たる大乘院において、元雅は三郎元重と十二次郎とともに十五番の能を演じている（演じ

た番数は元雅六番、元重五番、十二次郎四番で、元雅が一番多い。このことは、従来も『大乘院寺社雑事記』長祿二年三月十六日条に転載されている康正三年（長祿元年、一四五七）二月の『大乘院門跡下知状』（生駒宝山寺に原本が伝存）中に、
応永三十四年二月九日のこととして、

金晴・観世三郎・同十郎・十二次郎、四人同時被召之。
於脇者、一切不及相論金春沙汰旨記録分明也。

とあることによって、あるていどは知られてはいた。この下知状は康正三年（長祿元年）の大乘院での別当坊猿楽のさい、脇能の担当をめぐって金春と金剛のあいだに争いがあつたとき、大乘院門跡の尋尊が先例を示して、脇能の担当は金春に決まっていると下した裁定で、そこに応永三十四年の大乘院での脇能も金春の担当だったとしたのが右の箇所である。もつとも、この記事は『応永三十四年能番組』の出現によって、実際には、二月九日に大蔵大夫が参上し、翌十日に元雅、元重、十二次郎らの観世グループが参上したのを、両日の演者を誤ってあるいは偽つて―九日の一日に合体させ、さらに九日に参上した大蔵を金春と誤つて―あるいは偽つて―いることが判明したのであるが、右に掲げた『大乘院門跡下知状』のように金春も参

上したかたちの記事だと、三郎元重が観世座の一員として出演していたかが明確ではなく、この記事はこれまでは三郎元重の分派的な活動の一事例とみなされていたのではないかと思われる。しかるに、新出の『応永三十四年能番組』によれば、事實は二月九日は大蔵大夫の参上、翌十日の能が元雅、元重、十二次郎という観世座だけの能だったのである。ここで想起されるのが、『申楽談儀』二十八条に「大乘院へは一座一座参りしほどに、脇の沙汰なし」とあるように、二日が通例だった大乘院での別当坊猿楽は異なる座が一座ずつ別々に参上するのが慣例だったことである。つまり、二月十日の元雅、元重、十二次郎による能は「一座」すなわち観世座による能だったことになって、『応永三十四年能番組』によって正確な実態が明らかになった同年の大乘院での別当坊猿楽には、三郎元重が観世座の一員として参加していたことが知られるわけである。そのことは、とりもなおさず、この時点では三郎元重は確実に観世座の一員だったことを意味していることになる。なお、『応永三十四年能番組』に所見の演目には、これまでは後代の制作と考えられていた作品が少なからずふくまれている、いずれかといえば、作品研究への影響への大きさに関心が向けられていたが、みてきたように同番組は世阿弥晩年期の能界の状況についても有用な資料であり、今後はそ

の方面でも活用されることになろう。

このほか、世阿弥・元雅父子と三郎元重の一座（共演）が確実に知られる例としては、応永二十九年（一四二二）や同三十一年の醍醐清瀧宮祭礼能があるが、そこでも棟梁の為手は元雅で、三郎元重（そして七郎元能も）はワキの為手であったはずで、それが世阿弥が元雅に家督を譲った応永二十九年以後の観世座の組織としての形態であったと思われる。そのような座としての形態が『習道書』執筆の永享二年（一四三〇）三月まで続いていた可能性は高く（右にみたように応永三十四年には元重は確実に観世座の一員であった）、そうであれば、同書にいう「脇の為手の上手」に七郎元能とともに三郎元重を加えるのは、ごく自然な想定といつてよいであろう。

しからば、『習道書』にいう「脇の為手の上手」は七郎元能と考えるべきか、三郎元重と考えるべきかであるが、これは三郎元重と考えるべきかと思う。というのは、『習道書』には、前掲のように「棟梁不足なればとて、脇の為手の上手、別心の曲をなさば、一座不同にして、能の順路あるべからず」という一文があり、これなどは当時、あるいはその時期までの観世座では座内の「脇の為手の上手」が棟梁の意に反して「別心の曲」をなすことがしばしばあったことをうかがわせるのだが、そのようなワキの為手

としては、世阿弥の意向を忠実に守ったと思われる七郎元能ではなく、三郎元重をそれと想定するのが自然であろう（元能が世阿弥の教えに忠実だったろうことは『申楽談儀』の奥書や、同書が編纂後、世阿弥に献呈されたらしいことにかがえる）。

かくて、『習道書』にいう「脇の為手の上手」は三郎元重を念頭においたものであろう、というのが私見なのだが、じつはそう考えることによつて、表章氏が提起された問題が整合的に説明できるのである。

表章氏の問題提起の中心は、「祖父にも越えたる堪能」とまで評価されている元雅が、『習道書』の一文によると、「不足の棟梁の為手」になつてしまふ点にあつた（もちろん、この一文が一般論ではないとした場合であるが）。たしかに、棟梁たる元雅の芸力が一座のワキの為手より劣るといふのは、それだけを聞くと、いささか考えがたいことと誰もが思うであろう。しかし、そのワキの為手が三郎元重であるならば、状況は一変する。三郎元重は元雅より年長で、世阿弥が観世座の棟梁を譲るつもりでいた役者である。永享以後、応仁元年（一四六七）に没するまでのその活動ぶりを見ると、三郎元重は世阿弥にまさるとも劣らぬ芸力の持主だったことは疑いがなく、その芸力も元雅の一步先を行っていたと考えるても大過あるまい。その三郎元重のことを永享二年（一四三〇）三月の時点で、世阿弥がなお観世

座の一員(ワキの為手)と考えていたとすると、「たとひ棟梁の不足なりとも…」という『習道書』の棟梁不足説は、当時の観世座内の状況をふまえたものとなって、まことにすつきりと説明がつくのである。

以上が『習道書』の棟梁不足説についての私解であるが、じつはこの問題について平成十一年に先述のような問題提起をされた表章氏は、昭和六十三年の『岩波講座能・狂言Ⅱ(能楽の伝書と芸論)』では、『習道書』の問題の箇所について言及したさい、「そこは元重をも「脇之為手」に含める立場からの発言かも知れない」と注(二行の割注)で述べておられる。要するに、『習道書』に記されている、棟梁の為手たる元雅より上の技量を持ち、棟梁の為手とは「別心の曲」をなしかねない脇の為手は三郎元重の可能性があるという見解である。平成十一年の「観世流史参究」ではそのかつての見解にふれておられないが、この表氏のかつての見解が私解と同じであることはいうまでもあるまい。ともあれ、かつて私解と同じような推測が存在したことがあったことを報告して、その補強としておきたい。

【4、私説に付随する一、二の問題】

以上が表章氏の問題提起にたいする私見だが、ここではその補足として、私説に付随する若干の問題について述べ

ておきたい。

まず、以上述べききたった私説では、『習道書』奥書年記の永享二年(一四三〇)三月の時点で、世阿弥が三郎元重を観世座の一員(ワキの為手)とみなしていることになる。いうまでもなく、その点が私説の最重要部分なのだが、しかし、そのように考えた場合、『習道書』の執筆動機や永享初年の能界の状況についても、従来の理解を見直す必要が出てくるように思う。

そもそも、これまで考えられてきた『習道書』の執筆動機は、義教が足利將軍家の家督を相続した正長元年(応永三十五年、一四二八)以来、義教の後援のもと、世阿弥父子とは別個に、あたかも一座の棟梁のごとくに活動しはじめていた三郎元重に対抗すべく、観世座の座衆の結束をはかるため、とするのが一般的であった。それは『習道書』執筆当時は、観世座はすでに元雅の座と元重の座に分裂していたとする見解と一体で、それが当時の状況についての能楽研究の定説でもあった。表章氏が平成十一年の「観世流史参究」で、問題の『習道書』の一文を当時の観世座の状況とかかわらせて考えようとして、そこに三郎元重の存在をまったく考えなかつたのも、そうした定説に依拠した結果かと思われる。しかし、私見のように、永享二年三月の時点で、世阿弥が三郎元重を観世座の一員とみなしていた

とすれば、『習道書』の執筆動機は、組織上はワキの為手という座の一員である三郎元重が、自身の芸力や義教の後援をたてに、棟梁とは「別心の曲」をなすことが多くなってきた状況をうけて、三郎元重をも含めた座衆の結束をはかることを目的に執筆したということになって、『習道書』の執筆動機についての理解が従来とは微妙に異なってくる。その結果、問題のワキの為手の心得を説いた条においては、世阿弥の筆はワキの為手の心得を説く文脈から逸脱して、つい、ここ数年來の三郎元重の「別心の曲」を強く非難することになったのではないか、ということになるかと思う。

また、永享二年（一四三〇）三月の『習道書』執筆の時点で、世阿弥が三郎元重を観世座の一員と考えていたとすれば、それがいつまで続いたかが問題になる。しかし、それはそう遠い先のことではなく、前稿（世阿弥と三郎元重（その一））で論じたように、三郎元重が実質的に観世大夫の地位を獲得したと思われる永享二年末から永享三年初頭ころまでのことで、それ以後は、従来もいわれているとおり、観世座は世阿弥父子の座と三郎元重の座に分裂したとみてよいであろう。分裂とはいっても、それはとくに三郎元重が独立を宣言するとか、世阿弥が三郎元重を座から除名したとかいうことではなく、將軍義教の強力な三郎元重引き

立ての結果として、おのずと二座が並立する状況になったというのが実情に近いのではないかと思われるが、こうしてみると、『習道書』は観世座分裂の直前、三郎元重がまだかろうじて観世座の一員であった時期に、世阿弥が一座の結束を願って執筆した書ということになる。ということは、『習道書』執筆時には、世阿弥はなお三郎元重と一座しての演能を予想していたことになるが、その後の義教の三郎元重引き立ては世阿弥の予想をはるかにこえたものであって、『習道書』執筆後は世阿弥父子と三郎元重が一座する機会はまったくなかったものと思われる。あるいは、『観世大夫両座』と記された永享元年（一四二九）五月の催しが両者が一座したさいこの場だったことも十分考えられるのであって、このように考えてくると、世阿弥が『習道書』にこめた願いは、まもなくきびしい現実の前にむなししい画餅と化したことになるわけである。

三 元雅が観世家の歴代に

数えられていない理由をめぐって

【1、元雅が観世大夫を継承して以後の三郎元重の心情】
これまでは三郎元重が観世座内でいかなる位置にいたかについて、永享元年（一四二九）五月の室町御所での

立合能と、永享二年三月の年記奥書をもつ『習道書』のワキの為手の心得について説いた条の記述（棟梁不足）説をめぐって検討したが、三郎元重と観世座との関係という点では、もうひとつ、明らかに観世大夫であった元雅が観世家の系譜においては歴代に教えられていない理由について考えてみる必要があると思う。この点は後述のようにはやくから表章氏が問題にされていたことであるが、この問題はたんに元雅だけの問題ではなく、三郎元重と観世座の関係、とりわけ十郎元雅が観世大夫を継承した応永二十九年以降における三郎元重と観世座との関係についても不可分のことと思われるのである。そこで、まずこの項では、これまでの検討をもふまえつつ、この問題を元雅が観世座の棟梁となった応永二十九年以降の三郎元重の「心情」に焦点をあてて考えてみることにしたい。

前節では『習道書』の「棟梁不足」説をめぐって、当時の世阿弥が三郎元重をなお観世座の一員とみなしていたらうと推定したが、いうまでもなく、三郎元重はもともと観世座の一員であった（応永二十九年と同三十一年の清瀧宮祭祀で世阿弥と一座していることなどを参照されたい）。しかも、彼能で世阿弥と一座していることなどを参照されたい。しかも、彼能ではたんなる一員というだけでなく、ある時期までは、世阿弥によってその後継者とみなされていたと思われる。そのことは、冒頭にも紹介した香西精氏の論考「元雅

行年考―新三郎元重養嗣子説―」において、世阿弥が「三郎」という観世家の嫡子の通称を元重に与えている事実をもとに論証されたことで、現在では、世阿弥と三郎元重の関係については、そう考えるのが当然となっている。その場合、その「ある時期まで」の「ある時期」をいつごろと考えればよいかが大きな問題となるが（その点は世阿弥が第四郎に芸論を与えた時期などが目安になるが、これについては次回の続稿で論じる予定）、ともあれ、ある時期まで三郎元重が観世座（あるいは観世家）の継承者とされていたことは疑いのないことと思われる。それが応永二十九年（一四三二）ころに世阿弥が出家したあと、観世座の棟梁（観世大夫）は元雅が継承した。そのことは、先学が指摘されてきたように、『申楽談儀』二十七条で応永元年（一四二九）三月の薪能で「観世大夫元雅」が《八幡放生会の能》（《放生川》）を演じたとする記事が端的に物語つていよう。また、それは、世阿弥自身が『夢跡一紙』や『却来華』で、元雅には生前、「道の秘伝・奥義」をすべて相伝したと記していることにもうかがえよう。こうして、応永二十九年以降の三郎元重は、かつての観世座（観世家）の後継者から、年下の元雅を棟梁とする観世座のワキの為手となったのであるが、前節までに縷々検討したのは、そうした時期の観世座と三郎元重との関係であった。その結果、三郎元重は、『習道書』奥

書年記の永享二年（一四三〇）三月ころまでは、その観世座の一員とみなされていたろうと推定したのであるが、ここで問題にしたいのは、元雅を棟梁とする観世座のワキの為手という位置を、三郎元重がどのように受け止めていたか、ということである。もちろん、そのようなことを直接示す資料は皆無であり、元重の心理や感情というようなことは今日からはとうてい知りうべくもないことであろうが、観世座の継承を約束されていたかつての地位を思えば、三郎元重がそこになんらかのこだわりを感じていたと考えることは常識的にも許されるであろう。かりに、三郎元重が観世座の後継者とみなされていた時期が応永二十九年をそうさかのぼらないころであったとすれば、そうした思いはそれだけ強かったことになる。その場合、観世座の棟梁の座が世阿弥から元雅に譲られたのは、三郎元重には養父世阿弥の約束違反と映ったことも十分考えられるであろう。もちろんこれはあくまでもひとつの仮定であるが、そのようなことも考えられる状況のなか、元雅は永享四年（二四三三）八月に伊勢で客死し、その結果、世阿弥の嫡流に後継者がいないなか、観世座の棟梁の座は、いわばおのずと三郎元重のもとに転がりこんできたのである。

以上が筆者が考える、元雅が観世大夫を継承した応永二十九年以降の三郎元重の心情である。要するに、少なく

とも三郎元重は世阿弥が元雅に観世座の棟梁の座を譲った応永二十九年以降の状況を従順に受け入れていたわけではあるまいとみているわけである。もちろん、さきに述べたように、この推測にはこれという明確な根拠があるわけではない。しかし、香西氏が論考「元雅行年考―新・元重養嗣子説―」で指摘されたように、世阿弥が三郎元重を後継者とみなしていた事実をふまえるならば、そう考えるのがむしろ自然なのではないだろうか。

【2、元雅が観世家の歴代に数えられていない理由】

応永二十九年以降の三郎元重の心情がこのように考えられるならば、観世大夫を継承していたことが確実な元雅が観世家の歴代に加えられていないことについても、従来とはやや異なる理由が浮上してくる。

これまでも述べてきたように、観世座の棟梁（観世家の当主）は世阿弥から元雅に継承されている。これに従えば、観世家の三代目は元雅となるのだが、江戸時代編纂の『観世葉履歴』など観世家の家譜では、元雅を代数に入れず、三郎元重を第三代としているのである。この点に注目し、はやくからその理由を考えてきたのが表章氏で、同氏は、まず「観世大夫元雅小考―大夫号の意義の変遷―」（『鑿仙』昭和五十三年一月）でこの問題をとりあげ、観世大夫という呼

称が三郎元重（音阿弥）の時代以降、室町幕府の職名的な称号になったとの見解のもと、元雅が観世家の歴代に数えられていないのは、元雅がほとんど幕府に用いられなかつたため、それは当然のことであり、かつ妥当な処置だとされている。同氏はさらに、「観世流史参究」の「⑥観世十郎元雅とその後裔」〔観世〕平成十一年四月〕においても、「観世大夫の歴代に数えない理由」の一項を設け（このことはすでに紹介）、前稿と同じ趣旨のことを要約して述べている。

この表章氏の見解は大夫号の意味をふまえた点など傾聴すべきものであるが、三郎元重が棟梁の為手となるまでの経緯が前項のようなものであつたとすると、以下のような事情もその理由として考えられるのではないだろうか。

すなわち、三郎元重にしてみれば、棟梁の為手の座が元雅の死によつて自身のもとに転がりこんできたとき、世阿弥の死よとの観世座の棟梁の為手はもともと自分が約束されていたもので、それが元雅のものとなつたのはあくまでも世阿弥の違約のためであり、自分こそが世阿弥のあとの観世座の棟梁（観世家の当主）の正当な継承者だという思いがあつたのではないか、ということである。同時にそれは、三郎元重が十年あまり観世座の棟梁の地位にあつた元雅を棟梁として認めていなかったろうことを意味するが、そのことはなによりもその後の観世家が元雅を観世家の歴代に

数えていない事実が雄弁に物語っているのではないだろうか。筆者はさきに、元雅が観世大夫を継承したあとの三郎元重の心情など今日からは知りうべくもないとしたが、三郎元重以降の観世家が元雅を歴代に加えていないことに、彼の心情が端的に刻印されているとみることもできよう。

ともあれ、三郎元重が自身の棟梁就任を以上のように受けとめていたとすれば、三郎元重を直接の祖とするその後の観世家が元雅を歴代に加えていないのは当然のことと首肯されるのではないだろうか。ということは、観世家が元雅を歴代に数えていないのは、後代の観世家の判断ではなく、上記のような三郎元重の心情あるいは主張―世阿弥のあとの観世座の正当な継承者は自分であるという主張―に由来し、その主張が代々観世家に伝えられたものということになるかと思う。

以上はこれという資料上の裏づけをもたない推測ではあるが、元重が三郎という名を世阿弥から与えられている事実をふまえるならば、ありうべきこととして一説として認められるのではないかと思う。なお、以上の私説はかならずしも表章氏の所説を排除するものではない。観世家が元雅を歴代に入れていないことについては、表氏が想定されているような公的な理由と私説のような三郎元重の私的な理由との二つをあわせ考える必要があると思うからである。

むすび

本稿では、もっぱら三郎元重と組織としての観世座の関係をみてきたが、すでに何度か言及しているように、そのことと三郎元重が世阿弥父子と別行動をとるようになったこととは別の問題である。それを伝えるもつとも早い資料が応永三十四年（一四二七）の稲荷辺での勸進能興行であるが、例の永享元年（一四二九）の「観世大夫両座」のさいのここと思われる、つぎの『申楽談儀』十一條の記事も、その点についての貴重な資料であろう。すなわち、同書には、

鶺鴒の能に、「真如の月や出ぬらん、くく、今の御所、馬場の能の時、下に早く言ひて、真中の坪に入らざりしなり。「月や」から、きつきつと拍子にて持つて、「出ぬらん」と言て、行く足を宙に持つて、どうど踏む所なり。かやうの所、下の拍子なり。その能、入組の座並にてせしゆへなり。

とあつて、そのときの《鶺鴒》が「入組の座並」で演じられたがために、地謡との呼吸が合わず、「真如の月や出で

ぬらん」の足拍子のタイミングがうまくとれなかったとの世阿弥自身の発言が記されている。この「入組の座並」は世阿弥父子が「一手」を組んだ三郎元重のグループとの混成を意味し、《鶺鴒》の地謡が元重グループの役者の担当だったことを意味しているが、そのために足拍子のタイミングが合わなかったというのは、この時期の「両座（両グループ）」の疎遠な関係をうかがわせるまことに興味深い発言である。このような状況―いわば三郎元重の分派活動―がいつごろから生まれたかも、世阿弥と三郎元重の関係を考える場合の重要な問題点であるが、その点は次回の続稿でふれることになろう。